

タイトル「熊本を思いながら」

2009年の秋を思い返すと、熊本で過ごした日々が目には浮かびます。文学的、歴史的な由緒ある土地、率直な人々、苔むした古木のある風景にもまして、文学館と文学隊との出会いは、特別に印象深い出来事でした。

各自ごちそうを持ち寄り、一晩中文学を論じ合う、文学隊のような熱意あふれるグループに、私は新しさと同時に、「懐かしさ」を感じました。

といいますのは、旧東ドイツ時代、若かった私たちは、そのように集まっては新刊書、演劇の演出、政治などについて熱くなって議論していたからです。友人と意見を交換することは、自分のものの見方を確立する助けになりましたし、演劇であれ、文学であれ、本当に価値あるものについての情報を与えてもらうことにもなりました。友人の価値判断は私の視野を広げてくれ、ベルリンの豊かな文化的風土の中で方向を見定めるための羅針盤ともなったのです。

今日、私たちは宣伝やメディアに乗せられて手を出し、失望して腹を立てることがしばしばあります。当時の友人なら警告してくれたことでしょう。友人の薦めなら信頼できますし、見たり読んだりした後で共通の話題として議論もできます。

けれどもドイツ統一以来、このような友人の輪はばらばらになってしまったようです。人と会う日時を約束できません。二人ですら難しいのです。大勢でパーティーを開くことなどほとんど不可能です。誰も彼も時間がない、忙しいのです。以前は全員がお互いに友人どうしである、大きな輪の中で生き、ものを考えていました。それは、当時の東ドイツの硬直した独断的な政治状況の中で人間らしく生き続けるための、私的なネットワークでした。今、私は「自由」です。どんな催しにも行くことができます。けれどもたいていは一人で行き、終わればまた一人で家に帰ります。私の友人はお互いに知り合いではありません。これは私だけの例外的な事態ではないのです。

このような時代における熊本文学隊との出会い、古い文学にも近代文学にも詳しく、調査も執筆もする、そしてお互いに友人である、さまざまな年齢層の方々との出会いは、思い出の国への帰還のようでした。そこは、誰も追放され

ることのない唯一の場所、いわば失われた故郷ではありますが、熊本での体験が示すように、また何度でも新しく作り出すことができる国です。皮肉のように聞こえるかもしれませんが、生活状況が今後さらに厳しくなっていけば、私たちは再びお互いに近づき、精神的な共同体を大切に思うようになるだろう、と思うことがあります。ドイツではまだ状況が良すぎるのかもしれませんが。私たちは、互いに気持ちを寄せ合うよりも、個人のエゴイズムに溺れて、テレビの前に引きこもっているのです。私は、旧友に電話をかけ、料理をして我が家に招く、あるいは森□外記念館で長期的に文学サロンを開く（それなら私は料理をしなくて済みます）、と固く決心して、ドイツに帰ってきました。いずれにせよ、しっかりと組織された開放的な文学館と文学隊との繋がりは私にとって大切な刺激であり続けます。

私の出発が、森□外記念館における坂村真民展の開催と重なったことは、私の熊本文学館に対する「アットホームな」気持ちを強めただけでなく、古いことわざ「類は友を呼ぶ」を思い起こさせました。坂村真民は私が心から尊敬する詩人です。彼の禅詩を素材に、10年ほど前、ベルリンで書道展を催したことがあります。

さらに思考を深めるための刺激として「日本の文学者間のホモソーシャルな関係」、「文学記念碑の哲学」などのテーマを熊本から持ち帰りました。坂村真民の碑だけでも700を越える数があると聞きました。私たちの所には、このような伝統はありません。文学碑について記事を書き、ドイツの文学愛好者に知らせたいと思います。皆様からアドバイスがいただければ幸いです。いろいろお教をを請いたく存じます。皆さまとの繋がりを大切に思い、いつまでも続くこと願って止みません。